

事例名称： 甘楽郡下仁田町 財団法人 神津牧場

地域に根づいた山地酪農のパイオニア

- ジャージー牛からの贈り物と歩んだ120年 -

【地方審査委員が評価したポイント】

当該事例は、全国でも有数なジャージー種のメッカとして、山地酪農を120年間の長きにわたり創設者の基本理念を継承し実践している事例である。当該牧場の基本理念は、草作り、放牧、ジャージー種、乳製品加工という牧場理念に加え、風光明媚な山岳地帯という立地条件を活用し、牧場景観の提供、すなわち現在のグリーンツーリズムをも備えた山地酪農のパイオニアとして全国に評価されている事例である。その日常的運営が当該地域の振興、あるいは本県並びに全国に波及した成果は歴史と共に数え切れないほどのものがある。

そこで、地域振興という観点から審査委員会で評価した点は以下のものである。

まず第1点は、ジャージー種の改良増殖と山地放牧酪農の実践である。

ジャージー種の改良面では産乳量を飛躍的に高めたこと、優良種牛の配布を実施してきたこと、草地並びに放牧管理技術では関係研究機関との連携により開発された技術は数多くあり、本県のみならず全国でも成果の活用が波及していることである。

第2に、乳製品加工とその技術研修生の受け入れである。当牧場ではジャージー牛乳を原料としたブランド製品を開発して、幅広く消費者に提供し、消費者から神津牧場の・・・、という評価が得られている。また、製品製造にあたっては、研修生を受け入れ、広く製造技術者の要請にも応えている。

第3は、自然と調和した「ふれあい体験」、グリーンツーリズム機能をはじめとする多面的機能の発揮や酪農教育ファームとしての機能である。当該地域は国道からかなり入ったところに位置し、単なる山地であるものが、当牧場の存在によってそれを核とした観光、教育、体験等々、数多くの素材を有し、地域の活性化に貢献している。これには牧場職員が一丸となって牧場設置理念に基づく体制で取り組んでいることはもとより、下仁田町、長野県佐久市とも連携し、数々の行事を開牧以来継承した結果といえる。

第4は、地域の雇用創出貢献である。当該牧場は、開牧以来、地域の雇用労働によって運営し、現在ではパートを含め22人で、地域雇用が中心である。また、牧場管理や飼料生産など短期労働力として雇用するなど、地域活性化に貢献している。

以上、当該牧場は全国的にも有名であるが、牧場の存在によって地域の活性化に多大な貢献がなされており、当委員会の各委員とも本事例の詳細を広く公開し、類似する牧場や関係団体に波及することが重要と認めたものである。

○地域畜産振興活動の内容

(1) 地域畜産振興につながる活動・取り組みの具体的な内容

財団法人の公益目的として、大規模牧場の経営管理技術の向上発展、優良乳用牛の生産供給、乳製品等畜産物の利用加工、緑資源の高度利用、などに関する調査研究、実証並びに研修を通じて、我が国畜産の長期的かつ安定的な発展と国民の生活福祉の向上に寄与することを掲げている。

このような活動を実践する中で、山地酪農を通じた地域振興につながる活動・取り組みを行ってきた。主な活動内容は以下のとおり。

1) ジャージー種の改良・増殖事業

牧場設立当初はバター生産を主力としていたため、乳量・乳質の改善が中心となり、まず適種選定から行った。その結果、乳用牛としてジャージー種が適種であると判断し、日本ジャージー種とでもいべきものをつくりあげてきた。

わが国のジャージー種は、戦後の振興策により昭和 40 年前後には一時3万頭近くに上ったが、昭和 61 年に3,858 頭にまで減少した。しかし、その後その品質のよさ(高脂肪分、高無脂固形分)が見直され、また早熟であり飼養の容易さから現在は1万頭に届こうかというレベルであるが、当牧場の変わらぬ理念が波及した結果とも言える。

特に改良部門では、昭和 35 年より人工授精による増殖を行い、これまでの改良効果は図1に示すとおりで、開設以来飛躍的な伸びを示していることが明らかである。

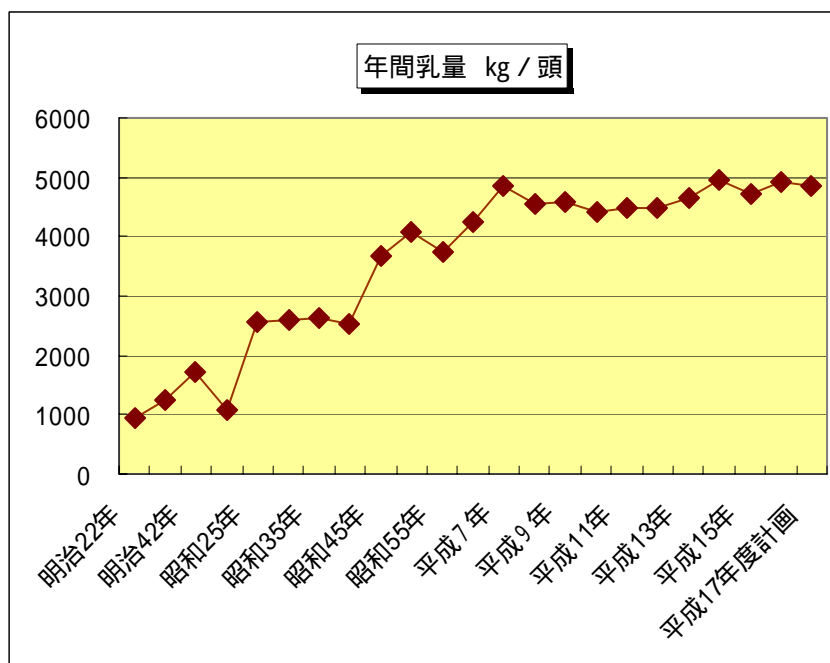


図1 神津牧場における個体乳量の推移

また、ジャージー登録協会の設立にも尽力し、昭和 31 年の同会の発足とともに登録を行っている。さらに、昭和 50 年代に、主要な生産地である秋田、岡山、熊本三県の有志によって設立された全国ジャージー酪農振興協議会において、「神津牧場は、ジャージー種のメッカとして、種牡牛や種牝牛の供給基地、飼養技術の先導的役割を果す」ことが要請されている。

種畜の供給は、開設以来連続と続けられている。明治 40 年頃より春秋2回の競売実施の記録がある

が、昭和 50 年代以降ジャージー種の評価が高まるにつれて相対取引による売却が増加していった。最近 10 年間の販売実績は表 1 に示すとおりであるが、特記すべきこととしては平成 11 年には沖縄県石垣島に 10 頭販売され、平成 17 年度には宮内庁の御料牧場に初妊牛 2 頭が販売されている。

また、全国共進会にも出品し、改良成果を全国に表している。

表 1 種畜の供給実績

| | 昭和 49 | 昭和 55 | 平成 7 | 平成 8 | 平成 9 | 平成 10 | 平成 11 | 平成 12 | 平成 13 | 平成 14 | 平成 15 | 平成 16 | 平成 17 | 平成 18 |
|-----|----------|----------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 初妊牛 | 5 | 5 | 9 | 6 | 6 | 1 | 17 | 0 | 2 | 4 | 0 | 4 | 3 | 7 |
| 若齢牛 | | 4 | 5 | | | 5 | 12 | 6 | 1 | 8 | 11 | 1 | 0 | 3 |
| 合計 | 5 | 9 | 14 | 6 | 6 | 6 | 29 | 6 | 3 | 12 | 11 | 5 | 3 | 10 |

2) 地域に適応した放牧酪農の実践

現在、ジャージー種約 200 頭を飼養し、そのうち搾乳牛は約 90 頭である。飼養方式は放牧を主体にしたものであり、創業者神津邦太郎の「草と牛は一体であり、草を乳に換える」精神に基づくもので、神津牧場の伝統として受け継がれてきている。

標高 1,375m の物見山の東斜面にあり、標高 850m ~ 1,375m に位置していることから全体が傾斜地であり、一部は地滑り地帯にもなっている。従って、全体を草地利用できる訳ではなく、現在の土地利用状況を整理すると、全面積 387ha のうち、草地在が 100ha、野草地在が 141ha、施設用地が 26ha で、残りの 120ha が水源涵養林及び土砂流出防備林となっている。

基盤となる草地の造成は、開設当初から実施され、人力による灌木除去の後牧草を播種した。昭和 30 年代に入って、機械力の導入とトウモロコシから牧草に転換したことから急傾斜地まで草地化が可能となり、一挙に面積が増大した。さらに昭和 40 年代に入り、地方競馬全国協会、群馬県及び下仁田町の補助事業によって一挙に 50ha の開墾を行い、ほぼ現在の利用面積が確保された。

当牧場は寒地型牧草の好適地であることから、オーチャードグラス、チモシー、ケンタッキーブルーグラス、レッドトップ、リードキャナリーグラス、シロクロバなどから成る混播草地で、高冷地における草種選定や造成手法など、研究機関と連携して技術開発を図り、他の類似する牧場に波及し、県下の公共牧場のモデルとなっている。

さらに、昭和 62 年にはロールベールの利用を始めており、全国的なロールベールの普及に先立つこと 10 年も早く、先端技術の導入にも積極的に対応し、自給飼料生産の体系化を誘導してきた。

3) 自然と調和した「ふれあい体験」

搾乳牛の昼夜放牧技術は、明治時代の創生期にすでに確立した技術であり、連綿と現在に受け継がれている。1日2回(早朝5時及び午後1時)の搾乳時だけ放牧地からパーラーに戻すが、その時の 100 頭前後の牛の行列は来場者に“牛との直接的なふれあいの場”を提供して強い印象を与え、当場の呼び物として定着している。また、場内には小動物、加工施設見学、搾乳見学など牧場体験をできる限り公開し、来場者への畜産展示を行っている。



来場者の前を通る牛の行列

4) 受託育成牛放牧事業(公共育成牧場としての機能)

昭和 43 年より、群馬県畜産開発公社が神津牧場の用地内に 40 ヘクタールの草地を造成し、利用施設の整備を行い、地元畜産農家の乳用育成牛預託の要望に応えることになった。これにより牧場の運営にとっても地元との連携が密になり、公共性も強まった。平成元年には開発公社の事業は終了したが、引き続き群馬県からの委託事業として、毎年、春から秋までの間、地元畜産農家の乳用育成牛を受け入れ、管理を行ってきた。この事業も平成 10 年度をもって終了したが、地域への貢献を旗印に、現在も、独自に 40ha の草地を用いて育成牧場としての業務を行っている。利用農家は群馬県内のほか、東京都や長野県などの酪農家である。平成以来の預託頭数の推移は表 2 のとおりである。

表 2 預託頭数の推移

| 年度 (平成) | ホルスタイン | ジャージー | 合計 |
|------------|--------|-------|----|
| 1 | 13 | 12 | 25 |
| 2 | 40 | 10 | 50 |
| 3 | 41 | 9 | 50 |
| 4 | 37 | 7 | 44 |
| 5 | 40 | 7 | 47 |
| 6 | 41 | 7 | 48 |
| 7 | 34 | 7 | 41 |
| 8 | 16 | 5 | 21 |
| 9 | 33 | 14 | 47 |
| 10 | 36 | 36 | 72 |
| 11 | 17 | 17 | 34 |
| 12 | 13 | 9 | 22 |
| 13 | 23 | 8 | 31 |
| 14 | 0 | 4 | 4 |
| 15 | 2 | 13 | 15 |
| 16 | 20 | 20 | 40 |
| 17 | 9 | 11 | 20 |
| 18 | 11 | 26 | 37 |

5) 乳製品の製造と加工技術の普及

神津牧場の他にない特徴の一つに、ジャージー種の搾乳から牛乳・乳製品の製造・加工・販売まで、一貫した経営を行っていることが上げられる。

ポイントは、高脂肪、高蛋白質のジャージー牛乳のメリットを最大限引き出すことにある。特に、バターは明治 22 年から製造を始めており、わが国最初の市販バターである。神津邦太郎と親交のあった福沢諭吉も「カウツバタ」以外は食べられぬと注文してきた記録がある。放牧主体のカロチンに由来する黄色のバターは、「神津牧場のゴールデンバター」として今日に至るも高いブランド評価を得ている。

昭和 47 年にはバルククーラの導入、昭和 48 年にはストレージタンク、ホモジナイザ冷却機の導入、牛乳の瓶詰、加工施設の許可を受け、さらに昭和 50 年代に入り、牛乳のパック加工施設の導入、セパレータ、バターチャンの能力更新など着々と乳製品の加工体制を確立していった。最近では、チーズ工場の建設など製造アイテムの増設にも取り組んでいる。

現在の製造品目は、パック牛乳、のむヨーグルト、アイスクリーム、ソフトクリーム、チーズ、バターであるが、それぞれへの牛乳の仕向け割合は図2のようである。パック乳、ソフトクリーム、バターが主力商品であることがわかるが、最近ではチーズ、ヨーグルトの伸びも大きい。

加工技術については特に定評があり、最近ではふれあい牧場協議会からの要請による専門技術研修なども行っている。さらに、沖縄県へ牛を販売した際にはソフトクリームの作り方を伝授するなど、加工技術の普及にも積極的に取り組んでいる。

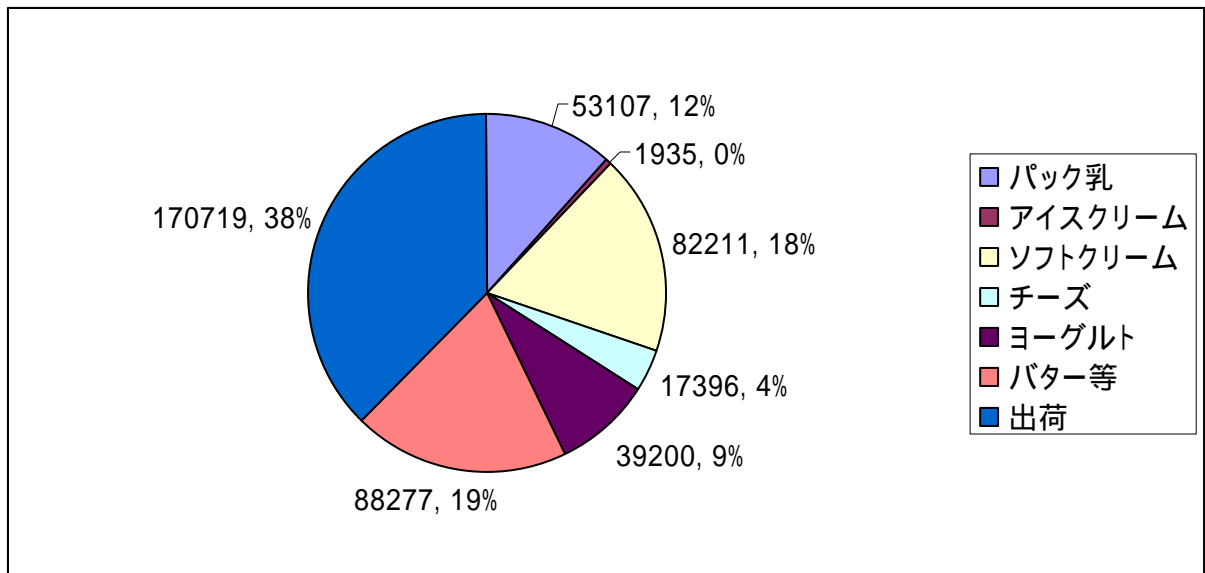


図2 牛乳の乳製品への仕向け割合 (kg, %)

6) 消費者と直結した神津ブランドの提供

表3 販売部門の割合

神津牧場の特徴の一つは、自ら製造した乳製品を直接販売していることである。販売は、場内の売店での直接販売とともに、道の駅や関東地区の百貨店などに卸販売を行って、販路の拡大を図っている。また、通信販売やインターネットによるショッピングも行っている。

従来は、売店での直接販売だけであったが、最近10年間において

は広く販路を拡大するために卸売のシェアを拡大してきた。現在は表3に示すように全体の売上げの3/4が卸売となっており、経営の安定化に大いに貢献している。

品目別の特徴は、ソフトクリームの売上げが半分近くを占めることである。これは「神津のソフトクリーム」が消費者の圧倒的な評価を受けている証拠とも言えよう。

販売額の推移は、図3に示すとおりである。販売額は平成に入って急成長し、ここ10年は1億4千万円を越えている。450tの生乳生産からこの金額を得ていることは、乳製品のブランド効果が高いことを示していると言えよう。

| | 卸売 | 直売 | 通信販売 | 合計 |
|---------|------|------|------|-------|
| パック牛乳 | 12.4 | 1.6 | 0.2 | 15.3 |
| バター | 4.1 | 1.7 | 1.2 | 9.9 |
| ソフトクリーム | 37.3 | 9.7 | | 47.7 |
| アイスクリ-ム | 0.7 | | | 4.1 |
| ヨーグルト | 7.0 | 2.4 | 0.4 | 19.3 |
| チーズ | 1.7 | 1.1 | 0.2 | 3.8 |
| 合計 | 76.3 | 20.9 | 2.9 | 100.0 |

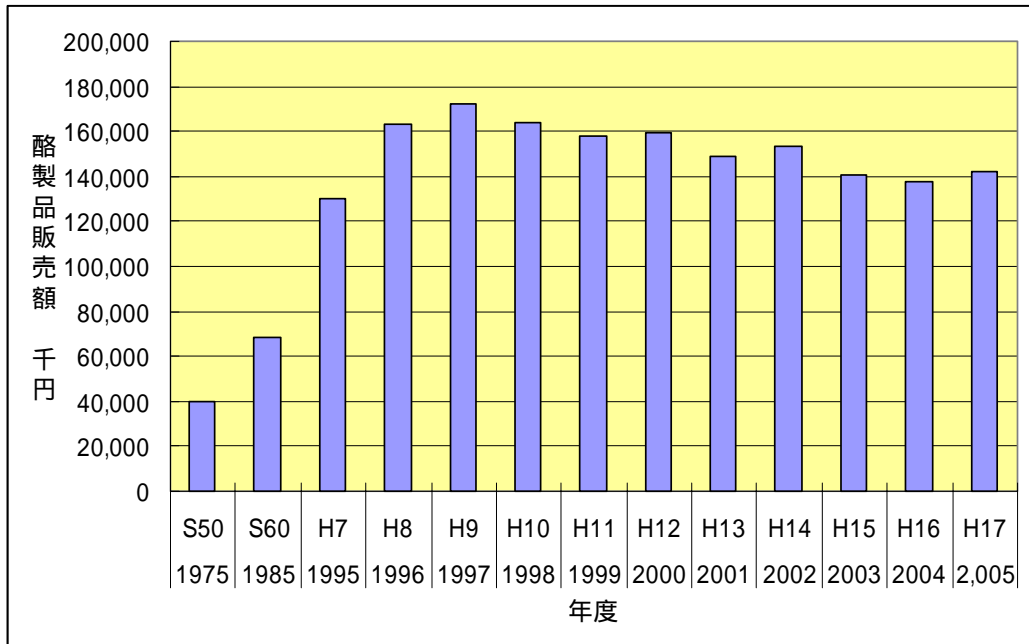


図3 乳製品販売額の推移

神津デイリー 『道の駅しもにたのミルクバー』

販路拡大と町興しへの貢献をねらいとして、下仁田町に設置された『道の駅しもにた』へ出店を行っている。当道の駅は、平成 15 年 12 月 6 日にオープンしたもので、上信越自動車道の下仁田インターチェンジを降り、国道 254 号線を佐久・軽井沢方面へ車で 2 分ほど行ったところにある。売店「神津牧場ミルクバー」は、この道の駅の主力テナントになっており、地域の活性化に大きく貢献している。ソフトクリームや乳製品のほかに、乳製品の副産物で飼育した牧場産の豚を用いたハム、ソーセージ、ベーコンなども販売しているが、販売実績は牧場の売店を上回る成果を上げている。

7) 多面的機能の地域貢献

グリーンツーリズムへの貢献 ふれあい牧場

当牧場には、大正の終わり頃から、荒船山や物見山の風光明媚さと高山の爽やかさを求めて、ハイキングなどでたくさんのお客さんが訪れるようになった。これをきっかけに、戦前から山荘を経営するようになり、来訪者の便宜を図るとともに、牛乳・乳製品の販売を行ってきた。その後、昭和 43 年に妙義・荒船・佐久高原国定公園に指定され、妙義・荒船林道の開通とともに、来訪者が増加の一途をたどるようになったため、昭和 46 年にロッジを開設し、今日に至っている。現在、檜造りの落ち着いた雰囲気のある食堂、ベッドを主体とした宿泊施設、牧場産の牛肉を提供している鉄板焼コーナーなどの施設がある。宿泊者のみが利用できる牛乳風呂も昔から有名である。

また、動物とのふれあい体験を醸成するため、積極的に子牛や放牧地の牛とのコンタクトが取れるように便宜を図っている。とくに、先述した牛の行列、カウハッチコーナーでの子牛との出会いは来場者にはかなりのインパクトを与えているようである。さらに、羊、山羊、ウサギなどの小動物コーナーを設け、直接触れるようにしたふれあいも奨めており、子供達への教育にも貢献している。

牧場体験 酪農教育ファームとしての機能

当牧場では、平成 3 年から都市住民に積極的に働きかけて高原牧場体験ツアーを実施している。こ

これは都市住民に実際の現場に来て貰い体験を通じて畜産をより理解して貰うのが目的である。体験項目は、チーズ、バター、アイスクリーム、薫製作りなど畜産物製品への理解を図るものから、牧場巡り、乳搾り、放牧など牧場での作業を実際に体験するものまで、多彩に用意している。牧場体験で常時受付けて実施しているのがバター作り体験であるが、これは実用規模のバターができることもあって体験者が非常に多い。平成12年から16年までの平均でも2,400人が毎年体験している。手作りしている間の対話も畜産や牧場への理解を醸成するのに大いに役立っている。

また、日帰りから1泊2日の宿泊体験などをイベントとしても実施している。平成8年からは、地方競馬全国協会、群馬県、群馬県畜産協会の補助もあって、子供たちに楽しみながら畜産を理解してもらうため、親子の宿泊牧場体験を行っている。毎年夏に2回、約20組60人程度の参加者があり、好評である。また、下仁田町と共催で毎年秋に1泊2日の牧場体験を地元の人たちに実施しているが、これも10組前後30人程度の参加を得ている。

なお、平成10年からは、酪農教育ファームの認証をうけて、酪農を通して、心の教育、いのちの教育、食の教育といった教育活動にも力を注いでいる。体験学習で訪れる児童生徒などは、平成17年度を例にとると、25件1,130人に上っている。

生物多様性の保全

長期間にわたり草地と森林の隣接する生態系を保持してきた結果、多様な動植物の保全がされてきた。右図に示すように、神津牧場を中心に周辺まで含めた観察コースも設けられており、神津牧場地区が地域の環境保全に貢献していることが認識されている。

植物：洋式牧場として当初から導入牧草を用いていたため、牧草に伴って入ってきたと思われる帰化植物も多く、神津牧場が本邦初見として図鑑に記載されている種もある(セイヨウノコギリソウ、ハルザキヤマガラシなど)。一方、アサマフウロなどの固有種も記録されている。

鳥類：野鳥の調査が行われており、ウグイス、アカゲラなど30種類もの鳥が棲んでいる。

動物：イノシシ、シカ、キツネ、タヌキ、テン、ハクビシン、アナグマなどが出没する。また、シュレーゲルアオガエルも県内生息地の高度限界となっている。現在、畜産草地研究所と共同で野生動物の生息について長期モニタリングを行っている。

アブ類：近年、専門研究者によって牛に飛来するアブの調査が行われており、神津牧場に由来する新種が3種発見されている。

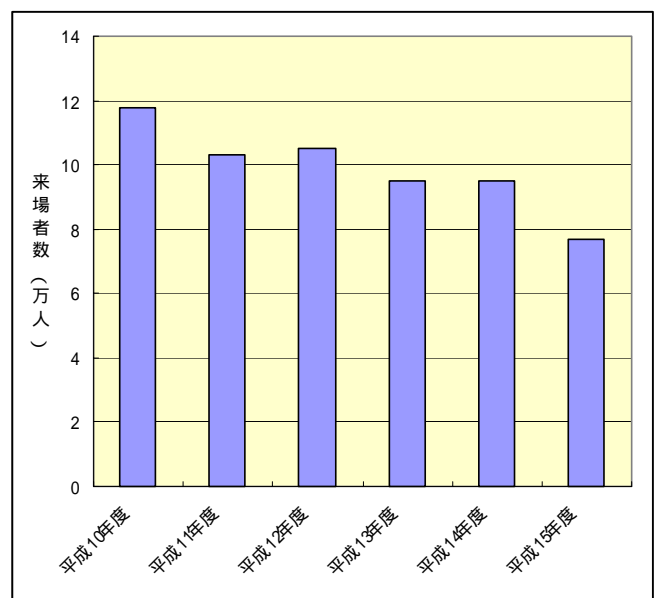


図4 来場者数の推移

地域との連携

< 憩いの場の提供 >

下仁田町は、神津牧場周辺地区を畜産を介した観光・交流拠点と位置づけ、親水公園や渓流の整備、歩道の整備、森林の整備等を行ってきた。折に触れて来場する人々は、10年前の調査であるが、最も来場者の多いと思われる8月の日曜日には2,200人にも上っており、年間15万人を越すと推定された。ソフトクリーム及びコップ牛



乳の販売実績からみた最近の推定入場者数は図4に示すとおりである。漸減傾向にあるが、なお10万人に近い来場者がある。来場者へのアンケート調査から、都市住民は、牧場や草地に対しては、安全でおいしい畜産物の生産のみならず、自然を守り景観を維持する機能、あるいは自然や動物に触れ保健休養に役立つ機能を求めているようで、神津牧場はまさにそのような機能を兼ね備えた場として認知されていると言えよう。

< イベントの開催、地域の各種フェアへの参加 >

神津牧場ならではの歴史、文化、緑や植物とのふれあいによって、地域畜産業の理解が深められることを目的に、毎年春の花まつり、秋のもみじまつりを町と共催している。町民をはじめ遠来の観光客も多く、来場者は毎回一日で2千人を越える盛況である。また、県や市町村、あるいは各種団体が主催するイベントには積極的に参加しており、神津牧場の出店は定番化している状況である。



花まつりのときに乳搾り体験に集まった人たち

地域貢献としての雇用創出など

牧場従業員は全員雇用労働のサラリーマンである。昭和20年の財団発足時には34人の職員数を数えたが、徐々に減少し昭和45年には6人となった。この時代の職員採用は地元採用が大部分を占めており、この面でも地域密着型であった。その後また徐々に増加し、開設100周年に当たる昭和62年には15人、現在はパートも含めて22人となっている。

地域の雇用創出という観点からいうと、かつては秋のエンシレージ作りや乾草上げに地元の人たちの雇用や請負が行われていた。多い時には数千人の人々が山に登ってきて、炊き出しが大変であったと記録されている。現在でも牧場管理に近隣の人たちの助力を得る関係は保持されており、このように地域の労働資源を積極的に活用してきたのも特徴である。

また、最近の地元との協調体制としては、中山間地直接支払いにおける個別協定の締結がある。下仁田町屋敷部落との個別協定を締結し、農地の保全に寄与している。

8) 研修及び調査研究による人材育成と技術開発支援

当牧場の寄付行為には「大規模牧場の経営管理技術に関する調査研究及び実証」と「緑資源の高度利用に関する調査研究及び実証」が掲げられており、国(現独立行政法人)や県の試験研究機関及び家畜改良センターとの共同研究・実証展示事業を実施している。

また、大学等の学生をはじめ、酪農研修を希望する者に対して研修を実施し、神津牧場でしか行えない、草地管理、飼養管理、加工、販売といった一貫体系技術の伝承に努めている。現在でも畜産草地研究所の新人研修を委託されており、長い歴史のなかでは、国の試験研究機関で活躍された方もおり、幅広く人材を育ててきたと言えよう。

さらに、ふれあい牧場の製酪担当者に専門的な乳製品製造研修を行って、技術の伝承・普及にも積極的に取り組んでいる。

表 4 研修等の受入

| | | 平成 12 | 平成 13 | 平成 14 | 平成 15 | 平成 16 | 平成 17 |
|---------|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 大学生等の実習 | 人 | 23 | 24 | 14 | 34 | 30 | 32 |
| | 延日 | 382 | 324 | 288 | 422 | 464 | 414 |
| 乳製品専門研修 | 人 | 3 | 4 | 4 | 7 | 5 | 0 |
| 新規就農研修 | 人 | | | | 2 | | |
| 畜草研新人研修 | 人 | | 2 | 2 | 2 | 8 | 5 |

なお、当牧場において働きながら技術を習得し独立していった人々がいる。大学等の教官になって活躍された方のほかに、各地においてジャージー牛の牧場を開設して活躍されている仲間もいる。青森で「ABITA ジャージー牧場」を運営している安原栄蔵氏や福井で「ラブリー牧場」を運営している松本忠司氏の活躍はめざましい。

活動画像



牧場全景



小屋へ帰る牛たち



宿泊体験施設



県事業で夏季に行う親子宿泊体験



社内施設



自家製加工品